或問　WAKUMON　145
No.10,（2005）pp.145-168

中国語口語の一般原理に関する覚え書（I）

ルイ・バザン
小野　文 訳

中国学者たちにとって当然とも言える関心事は――それを非難するつもりは私には全くないのだが――文語と古代の遺物に向ける彼らの興味と、それに付ける並はずれた価値にみられる。確かに古代の文書は貴重で大変難しく、そして特に押し進めるべき研究である。しかしだからと言って中国で話されていることばが、紛い物で混乱した、規則性のない崩れたことばなのではない。むしろ美しく気高いことばなのであって、これに形態の優美、素朴さ、柔軟性、力強い言葉、規則的な統辞法が存在しないなどとは言えないだろう。これは政治・商業に用いられることばとしての重要性を失っておらず、文学との関係においても無価値とは言えない言語なのである。

私は中国語研究において際だって明確に区別できる二つの観点があることを積極的に認めるものである。

一つの知的な観点とは、歴史上あるいは哲学上の記念碑的書物の意義を興味深く探るというもので、一つの文字の意味価値を定めるのに典籍に典籍を重ねるやり方であるが、この時ことばは抽象化されて、ほとんど関心を持たれていない。

いま一つの知的な観点とは、文字と話し言葉の関係を研究し、中国人の文法・統辞論のなかに、彼らがありのままに親しんでいる形に相当するものを探し、また読むものを選ぶときには、つねに理解されるために話しているような作者が、言いたいことを明確に書いている本を好んで選ぶやり方である。

以上が中国語の学習に見られる仕事の二つの次元、あるいはむしろ明確に区別される二つの実践例である。確かに古い書物のテクストに結びついている歴史や哲学・法律の問題は、つねに変わらない興味をひきおこす。しかし今日、中国は［外に］開かれている。学識者の動機とは別の動機がはたらいて、非常に有益・豊かでありながら軽視されてもいる中国人の民衆文学と同様に、この国で話されている幾つかの言語に我々の配慮をうながすのだ。こうした動機は、政治的な出来事や商業的要請のみならず、我が国以外で得られた文献学的知識の進歩そのものも手伝って増幅し、言ってみれば多様になっている。より気高い見方や損得勘定のない動機、より高い次元の考えというものが、若い聖職者たちの幾人かをキリスト教の利益のため、また信仰の普及のために中国語口語の学習へと向かわせるだろうことを私は信じて疑わない。

人が話している言語が研究されるより先に、文語が研究された。それは良いことであった。中国の各言語や方言を知らなかったために、ヨーロッパでは文語研究以外の仕事はおそらく時期尚早だったのだろう。今日にあっても、アベル＝レミュザ氏によって1822年に出版された『漢文啓蒙 Eléments de la Grammaire chinoise』[訳注1] は、口語の学習にとって大きな助けにも有益なものにもなりえないだろう。またもし私がアベル＝レミュザ氏のような学者の著作を判断する権利を持っているとするならば、私はこうも言うだろう。この有名な著者は、文学のさまざまな主題や歴史の諸事情に関する議論に関して、創意に富んだ覚え書の数々を出しており、それらは正しく評価されているのだが、この『漢文啓蒙』という文法書は、それらに対比できるものではないし、これからもできないであろう、と。私が彼の文法の仕事をこのように判断するのは、それほど大きな拡がりを見せないこの仕事に、関心をひく調査が欠けているから、またしごく正確な観察が欠けているからなのではない。またそれはアベル＝レミュザ氏があまりにテクニカルで衒学的な論証形式を用いているためでもない。この形式は全ての知性にとって理解可能だからである。しかしながら私見では、中国語の性格と基盤そのものに関する著者の原理に意義を唱えることができるかもしれない。またアベル＝レミュザ氏の意見は、彼の博識にもかかわらず、全ての点で事実と一致しているとは言えないようである。

ここ10年ほどの間に、セランプール、バタヴィア、マカオ、廣東で出版された素晴らしい研究が与えてくれる知識全てを収集した結果、現在用いられているような中国語の一般原理を覚え書の形で簡潔に提示することが可能であるように私には思われた。私が述べているような研究の幾つかは、実際には小冊子でしかない。その他のものは、ブリッジマン氏の『廣東語名文集 Chrestomathie Cantonnaise』[訳注2] や故タベール司教の『コーチシナ語辞書 Dictionnaires Cochinchinois』[訳注3] のような息の長い研究である。これら全ては大変興味深く、多彩なものである。それは取り扱っている主題からではなく、ヨーロッパ人の知識に初めて明らかにされる各言語の特殊な性格からして多彩なのである。最もおどろかされるのは、未だにフランス語において、簡単な方法と諸原理の明解な説明によって中国語口語の学習を助けるような初歩的な書物が存在しないということだ。本来ならば二つのことばの知識に同じぐらい精通した人がこのような仕事を引き受けるべきであろう。しかしさしあたりは、いわば時間が確立してしまった不完全な概念と間違った原理に立ち向かわなければならない。

私が時にアベル＝レミュザ氏に反論するようなことがあるとすれば、人から思いあがりやこ

[訳注1] バザンは（以下も同様に）このアベル＝レミュザの著作の題名をEléments...と表記しているが、正確には古い綴りでElémens...となっている。なおこの文法書が1857年に再版された時には、中国語の題名『漢文啓蒙』が付けられているので、日本語訳でもこの題名に従った。

[訳注2] 正確には、E. C. Bridgeman, *A Chenese Chrestomathy in the Canton Dialect*, Macao, S. Wells Williams, 1841.

[訳注3] 1838年に出版された『南越洋合字彙 *Dictionarium Anamitico-Latinum*』のこと。

の上ない軽率さを非難されないように、次のことを言っておこう。すなわちこの覚え書は私の授業のレジュメであり、これを見ていただいた学識豊かな何人もの文献学者からもすでに賛同を得ているものであるが、東洋語学校の私の最も古い聴講生たちが強い態度で私に出版させたようなものである。第 1 セクション（§1）は口語とその方言に、第 2 セクション（§2）は文字と言葉の関係について、第 3 セクション（§3）は書き言葉と話し言葉の対比に、第 4 セクション（§4）は総括また複合語の形成に、それぞれあてられている。

§1. 口語とその方言について

よく知られているように、中国には文語と口語という二つのことばがある。

文語とは何であろうか。

それは書かれることはあっても話されることはない、人工的で慣用による言語である（この点についてはアベル＝レミュザ氏自身も合意している）。それは非常に広範囲で用いられている言語で、中国全土、コーチシナ、日本、その他のところでも用いられているが、それも書物の中のみである。我々西洋の死語、例えばラテン語にこれを比するのは間違いであろう。文語、すなわち“文字 wen-tze”は、作為的な言語なのである。

文語はまた「書かれたことば」あるいは「書物のことば」と呼ばれる。これは口語、すなわち話されることばに対立してそう呼ばれるのだが、こちらの方は、書かれることは少ない。というのは、第 3 セクションで見るように、こちらは文語と比べてはるかに制限されているからだ。

口語とは何であろうか。

それはこの国の生きたことばであり、およそ二つの地方でそうである。それは共通語、万人のことばであり、全ての人が話すもので、言語に時が持ち込む変移や変容にも拘わらず、その普遍性を保ったまま今日まで持ちこたえている。また古来からある純粋なことばであり、他の言語との接触や混ざり合いもなく、何ものをも負っていない。共通語である“官話 kouan-hoa”は、自然言語である。

共通語“官話 kouan-hoa”は、二つの種類に分かれている。“北官話 po kouan-hoa”と“南官話 nan kouan-hoa”である。

北官話は北京の方言であり、南官話は南京の方言である。

官話はよって共通語で、万人のことばである。“能通行者。是謂官話 neng thoung hing tchee, che'wei kouan-hoa”[1]。しかし官話が共通語であるのなら、北官話と南官話があるのはどういう

[1] 『正音撮要 Tcheng-in-thso-yao』、第 4 章、1 頁を見よ。

訳なのか？ “既爲官話。何以有南北之稱 ki'wei kouan-hoa, ho-iyeou nan-po tche tcheheng？”[2]。それはなぜかというなら、北京の方言である北官話と南京の方言である南官話はとりわけ 2 つの点で区別されるからである。

1. 発音において。語の発音は、二つの方言において同じではない。子音“音 in”の分類が全く変わらなくとも、また唇音、歯音、喉音[3]などの子音が二つの方言において存在するとしても、同じ子音が常に同じ文字に当てられるとは限らない。つまり語を常に同じ仕方で発音するわけではない。母音すなわち“韻 yun”と特に“聲 cheng”についても同じことが言える。「官話を勉強しはじめると、まず何よりも発音に専念しなければならなくなる。南官話を勉強するなら、南方アクセントを身につけなければいけない。北官話を勉強するなら、北方アクセントに倣わなければいけない」[4]。

2. 特有語法において。二つの方言は、とりわけ特有語法において相異なっている。こうした特有語法は、特別な語彙集、例えば『南北官話語彙編大全 Nan-po kouan-hoa wei-pien ta-thsuen』などで勉強できる。これは 2 巻からなる小さな書物であるが、北京と南京で用いられている特有語法をすべて収めている。

一般に中国人は口語を全く勉強しない。子どもにとって、この言語は自然言語であるが、彼らはこれが話されるのを聞きながら学ぶのである。彼らは日常生活における交流をさらに進めるにつれて、口語の進歩を見せる。子どもたちが学校に入るとなると、これは文語の初歩を習うためである。それでも北京や帝国の他の大都市では“師傅 sse-fou”と呼ばれる特別な教師たちに会うことがあり、彼らは口語の読み書きを教えている。こうした教師たちは、我々の語学教師のように、簡単な方法を使っている。彼らは練習帳や教科書や、初歩的な小冊子を持っているが、それらはつねに 2 部に分かれており、第 1 部は会話で最もよく使う語の語彙集（“眼面前説的尋常話 yen-mien tsien choue-ti thsin-tchhang-hoa”）、第 2 部は平俗な対話を選んだもの（“問答的俗話 wen-ta-ti sou-hoa”）から成っている[5]。

しかし中国にはこの二つの方言しかないのだろうか？

［実際には］他にも地方の言語や俚言が存在する。

かつては中国の言語の数は、今よりも多くあった。古来からの著述家たちの証言に従えば、こうした言語の多様性は、この国で活字となった初期の演劇作品中の会話から窺い知ることができる。よって中国語の浅薄な知識だけでなく、それをより深めている文献学者がいれば、土地の人たちの助けを借りて、13 世紀から今日までの中国語の変化と発展の歴史に関する興味深

---

[2] 同上。

[3] 『正音撮要』第４章、１頁を見よ。

[4] 同掲書、第１章、19 頁。

[5] 『清文啓蒙 Thsing-wen-khi-moung』と題された、満州語文法に関する著作の第２本、27 頁（Bibliothèque royale 出版）と、『正音撮要』第２，３巻参照。

い研究に打ち込むこともできるだろう。それ以上遡りたい場合には、多くの障害に出会うだろうけれども。というのも私の知る限り、口語の最も古い資料は宋朝より後のものだからである。いつの時代から中国人は自らのことばを書き記しはじめたのかという問題は、取り扱わないことにする。この主題に関しては、私は確定的なことを何も言えないからだ。しかしながら西暦の 8 世紀、唐の玄宗帝の治世にそれが始まったのではないかと私は考えている。

宋朝より以前においては、各地方が独自の方言を持っていた。我々は孔子の時代に中国人が話していたことばについてどんな資料も持ち合わせていない。しかしながらこの哲学者の生きていた頃には、相当な数の方言が、現在ヨーロッパ人が中国と読んでいるこの国を分割していたことは推測に難くない。けれどもこれは私の主題の外にある。

注目に値する記録と私が考えているもの、それは 17 世紀の終わり頃に雍正帝によって発された政令で、帝国内のことばの統一を制定するものである。この政令の題は「上諭一道諭閩正郷音 Chang-iu-i-tao-iu-min-kouang-tcheng-hiang-in」、すなわち「廣東と福建地方（の住民）に共通語を話すよう厳命する勅令」という。これは『廣東通志 Kouang-toung-thoung-tche』、つまり『廣東の歴史と地理』の、第 1 セクション、66 頁に見つかる。これはロバート・トム氏によって非常に正確に英訳されているが[6]、氏は大変有能な中国学者で、現在は寧波の英国領事である。『正音撮要 Tcheng-in-thso-yao』すなわち『共通語の一般原理』の中国人著者は、この雍正帝を著作の筆頭に挙げている。この偉大な君主は、当時の最も学識ある宣教師たち、アダム・シャルやパラナン、ジェルビヨン、フェルディナン・ヴェルビエストたちと語り合った人物であり、また彼の名高い自伝に書かれていることによると[7]、中国人の数学者たちに対してヨーロッパの天文学を弁護し、我々の方法の優位を認め、また全帝国内でキリスト教が公に伝えられるのを許した人でもある。彼はまた百冊を越える詩や文学を著した人でもあった。雍正帝はつねに彼の国家がもつ先入観を凌駕する精神を示しおおせたのである。この帝国勅令の動機は、イエズス会の進言に従ったものかもしれないが、政治、それも最も気高く最も高尚なまつりごとから出たものである。

皇帝は次のように始めている。「我々が絶えず観察してきたところによると、我々の官吏は、文官も武官も、高官も下官も、王座の足下に平伏して帝試に関して報告書などを提出したり、嘆願書を寄越したりするのだが、廣東と福建地方の住民のみが、我々の分からない地方の言葉を話す」。

皇帝は、諸事、特に司法を治めるのにあまりに危険で有害なこの慣習に抗議している。

「治める者と治められる者が理解しあわない場合、司法官は通訳の役を務める最も地位の低い司法吏に（時にはそれが自分たちの使用人でさえあっても）頼らざるを得ない。しかしそう

---

6 『意拾喩言 *Esop's Fables*』、前書き、8 頁参照。

7 アベル＝レミュザ、『アジア雑録 *Mélanges asiatiques*』第 2 巻、雍正帝小伝。

すると誇張された話や意図的なためらい、間違った解釈などが積もって、そこから数限りない濫用というものが生まれてくることになる。このような行政システムは、不愉快な不明瞭さや数多くのぺてんを免れないだろう」。

その他にも賢明な反省を加えたのちに、皇帝は以下のように締めくくっている。

「このように最高の位にある者たちと最低の位にある者たちとの間に越えられない境界ができあがり、これが諸悪の根源となる。この地方の住民たちが、非常に幼い頃から特殊な言語に慣れているために、不正確で間違った発音を正すということに苦痛を感じるであろうこと、また人というものが年来の習慣をすぐに止めるものではないことは、我々も承知している。したがって我々は上述した二つの地方に教育の場を増やしたり、学校をいたるところに設立するということを決定した次第である。このような理由から、我々は命令する、等々」。

この時期尚早の勅令が、実りある結果をもたらさなかったことは言うまでもないだろう。皇帝の命に従って、廣東や福建地方の主要な都市には国語を教える学校が開かれたし、また今日も開かれているのだが、この地方出身の官吏は、身近な交渉では相変わらず地方の言語を話しているのである。女性や職人、村人たちに至っては、共通語を一語も知らない。今でも勅令は存在しているし、改革は試みられているのだ。

よって一方で、私がすでに話した書き言葉と話し言葉の区別というものがこれまで以上に歴然と存在するのに対し、もう一方で、文明の動きによって本能的に、徐々に、中国人はことばの統一という方向に押されている。書き言葉と話し言葉の区別は、残念ながら商業の面でも政治の面でも不可欠なものだ。口語を公令に用いることを定めたフランソワ 1 世の勅令のようなものは、中国では公布されないし、[されても] 全く遂行不可能だろう。これは第 4 パラグラフで述べることとする。

要するに、雍正帝の勅令から二つのことを確認できる。

第一に、今日中華帝国では、共通語とはかけはなれた方言である廣東方言と福建方言という二つの方言しか存在しないということ。

第二に、後になって帝国に組み入れられたこの二つの地方を除けば、中国の端から端まで話され理解される一つの共通で普遍的なことばが正に存在するということ。よって廣東方言と福建方言という、正しく言えば地方の言語と、口語の諸方言とを混同してはならない。口語の諸方言は、発音と幾つかのイディオムが違うのみであって、共通語にない言葉は見出せないからだ。一般的に、各方言の発音には言ってみればある種の変調、アクセントというものがあって、中国人はそれに非常に敏感で、、地方アクセント“郷音 hiang-in”と呼んでいる。今日では、上手に中国語を話すには、マカオのアクセントも廣東のアクセントも南京のアクセントもあってはならない、つまり首都の住民がもつアクセント以外はどんなアクセントもあってはならないとされる。とはいえ南京に朝廷がおかれていた頃は、北京方言は堕落した方言のように見なされていたこともある。けれども満州人が帝国の主となり、北京に政治の基をおいてからは、事

情が変わってしまった。ヨーロッパで教養課程と呼ぶところの知的教育を受けた地方の若者たちが、昔からの職に従事せずに、仕事を求めたり、社交界に出ようとして、出来るかぎり首都のアクセントをまね、また皇帝の話すように中国語を話そうと努力するのである。地方の管轄事務所・役所では、今の北京方言そのままに話している。

廣東と福建地方の方言について話したのだから、今度は“郷談 hiang-than”と呼ばれる俚言について話してみよう。これは地方や郡によってそれぞれ違うのだが、或る旧宣教師の言によれば、しばしば一つの郡の俚言は、海沿いの村と平野の村で変わるというぐらい、変化が激しいものである。

これについて、中国人の一旅行者の話を聞いてみよう[8]。

「帝国内のどんな郡にもどんな地方にも、土地のことば（“土語 thou-iu”）や俚言（“郷談 hian-than”）が存在する。ある郡の住民は別な住民のことばを解しない。これは全ての地方においてそうであって（“各省皆是 Ko seng kiaï che”）、廣東と福建地方だけが特別なのではない（“非獨閩廣爲然 Fei tou min kouang' wei jen”）。

「私はかつて江南、浙江、河南、両湖地方（湖北と湖南）を歩き廻ったことがある。それだから言うのだが、これら全ての地方で方言や地方の言語は同じではなかった（“方言土語不同 Fang-yen thou-iu pou thoung”）。さらに言うなら、地方では隣同士の者がつねに分かり合うとは限らないということだ。実に卸売商、取次業者（商品の売買を手がける者）のみが官話を話せるのである。こうした卸売商や取次業者は、陸路や水路（“水陸 chouï-lou”）を巡っては、港や大きな市の立つところにいるのだが、地方の住民はみんな地方の言語を話している・・・。

「しばらくして私が首都に入ったとき、私の驚きは倍増した。この大きな街の通りでは、行ったり来たりする個々人の群れ、親しげに語り合う 4, 5 人のグループの群れ（“三五成羣 san ou tchheng khiun”）に出会う。チンプンカンプン[9]！彼らはみんな俚言をしゃべっていたのだ（“打郷談 ta-hiang-than”）。私は彼らが何を言っていたのか知らない（“不知他説什麼 pou tche tha choue che-mo”）。

「だが私が彼らについて商店に入り、そこで彼らがあれやこれやを買おうとしていたときに気づいたのだが、彼らはいとも自由に共通語を話すのだ。彼らのうちの何人かは北官話（北京方言）を話し、他の者たちは南官話（南京方言）を話した。全ての者がきれいにはっきりと発音していた（“都説得清清楚楚的 tou choue tee thsing-thsing thsou-thsou-ti”）。私が彼らに話しかけて知ったことによると、どんな地方、どんな郡でも、公の仕事や商売の道で際だっている若者のうちで、官話を学ばない者はおらず（“沒有一個不學官話的 mou-yeou i-kô pou hio kouan-hoa ti”）、官話の知識なしでは帝国内も旅行できないということであった。

---

[8] この箇所は『正音撮要』前書き、第１章５頁からの抜粋である。

[9] Tsi-tsi koua-koua, オノマトペである。

「どんな地方でも、発音(“口音 kheou-in”)は一般的に正しく、規則にあっているということは確かだろう。官話を話すにも聞くにも、困難は感じられない。しかし廣東と福建地方では、発音はふつう不正確で間違っている。ものの呼び名(“物件稱呼 ou-kien tchheng-hou”)が共通語と同じではないのである。廣東や福建地方では、人は若いとき(“少年 chao-nien”)勉強したがらず(“又不肯學 yeou pou kheng hio”)、成長してからは(“臨到長大 lin-tao tchhang-ta”)、もはや正しく発音することができない(“就説不出来 tseou choue pou tchhou laï”)」。

中国語を話題にするとき、考慮に入れられないのが、この言語の年齢のことである。だがしかし、中国でも他の場所でも、ことばにはその時代がある。あるいはそれぞれの時代にそれぞれのことばがあると言った方がいいだろうか。とは言え、この言語の変遷、それが時とともに被った変更について考えたいと思った場合でも、それを我々ヨーロッパの諸言語と比較しようとは思わない方がよい。中国語にはほんのわずかずつしか変化しないという計り知れない利点がある。そしてこの「中央の王国」と言われた国においては、ある世紀から別の世紀への移動が、我々のところより、簡単なのである。しかし各王朝のもとで大なり小なり言語が変化したことは確かである。中国人が今日話していることばは、明の時代に彼らが話していたものではない。それは明朝のことばだったのであり、また別のものは元朝の、あるいは宋朝のことばだったのだ。

したがって、ふだんはその公正な批評と論争で知られるアベル=レミュザ氏が、モリソン氏(父)を非難して、モリソン氏の文法書では、アベル=レミュザ氏がそうしたようらに、「『王嬌梨』や『好逑傳』などの、文体が最も評価されている小説から例文をとらず」[10]、中国人の口から採集した複文を使用していると咎めた際に、アベル=レミュザ氏は二重の間違いを犯していたのである。

一つには、世界のどの言語においても、人が話すように書くのは非常に難しいということだ。中国語においては、この困難は増すのである。官話は書かれることからつねに逃れるばかりか、シボ神父の観察によれば[11]、あらかじめ人前で声に出して読まれるための書物以外では、うまく書かれることすらない。

また一つには、『王嬌梨』や『好逑傳』は、アベル=レミュザ氏の考えているような、中華帝国で現在使われている言語の資料ではなく、14 世紀の言語の資料であって、その中ではページごとに文語から借りてきた文や言い回しが見つかるのである。

外国語である満州語は、アルファベット式に書かれ、また中国語とは似ても似つかないものだが、宮廷・役所・駐留地で使われている。イエズス会の宣教師たちは、公的書類はふつう 2

---

[10] 『漢文啓蒙』、xxxiij [前書き 33] 頁。

[11] さらに驚くべきことには、(とシボ神父は続けて書いている)「第一級の文人が大変な苦労をしても、なんとか官話で会話のひとつも書くことができないのだ。彼はどんな漢字を使うべきなのかさえ知らないようだ」。(『北京の宣教師たちの覚え書 *Mémoires des missionnaires de Pékin*』、第 8 巻、226 頁)。

カ国語で発されると言っている。北京には通訳のためのコレージュ、外国語学校が存在し、その学長はつねに翰林の帝国アカデミーのメンバーであるが、彼の下には56人の教師ないし教授がいるのである。アベル＝レミュザ氏は、ある興味深い覚え書の中で、5世紀の初めには既にこのコレージュで8つの言語が教えられていたと伝えている。その8つとは、モンゴル語、西部タタール語、チベット語、サンスクリット語、ブカラ［現在のウズベキスタン］のペルシャ語、ウイグル語、アヴァ［ビルマ］の言語とシャム語である[12]。

まとめてしまえば、この大陸の巨大な国、中国は、我々のヨーロッパのように数多くのお互いに全く異なった言語によって分割されてはいないということだ。確かに一つの共通語と二つの地方語は、ヨーロッパ諸言語の複雑さと多様性に応えるものではない。

§2. 書記体系と言葉の関係

ここで、これまで表面的にしか扱われてこなかった、非常に興味深い問題に触れておきたい。それは中国人がもつ書記体系と言葉の関係である。

まず書記体系について話してみよう。アベル＝レミュザ氏は漢字の数がかなり誇張されていると述べているが、私も彼と同意見である。しかし一体、漢字の数はいくつあるのだろう？

まずギュツラフ氏の計算によると、1716年に初版が出た康熙帝の大辞書［康熙字典］には、43,496の文字がある[13]。二世紀の初頭、121年には、中国人は一万の漢字しか持っていなかった[14]。

康熙字典にある全ての漢字が、書き言葉に常用されているだろうか？

答えは否である。まず4,200字が意味を失っており、1,659字が字典に新たに加わり、6,423字が古い形となったり使われなくなったりしている。さらに、以下がギュツラフ氏による中国の文字数の調査である。

1. 常用漢字	31,214
2. 古くなったり廃れたりしている漢字	6,423
3. 新字	1,659
4. 意味を失った漢字	4,200

———————

[12] アベル＝レミュザ氏の『アジア雑録 *Mélanges asiatiques*』、第2巻、248頁を見られよ。

[13] ウェルス＝ウィリアムズ氏は、漢字の数を44,449と数え上げている。

[14] これはだいたい現在使われている漢字の3分の1の数である。『字彙 Tze-wei』には3万字しか含まれていない。

合計 43,496

康熙字典にある文字以外の文字は存在するのだろうか？

確かにあるだろう。書くことのできる方言全てにおいて、廣東方言や福建方言、コーチシナ方言において、共通語にはない文字が見受けられる。これを確かめるには、ブリッジマン氏の廣東語名文集やタベール司教のコーチシナ辞書を開けば十分である。この違いというものは、すでに別なところで述べたとおり、共通語の文字と方言の文字を形作っている線の形状が多少の変化を受けたという類のものではない。そうではなくて、ときに文字の中には線のつくりの組み合わせや連結の変わったものがある、ということなのだ。いすれにせよ、漢字の全体数は43,496字と定まっている。以上が書き言葉についてである。

今度は話し言葉について見ていこう。この43,496字の一つ一つが話し言葉の単音節にあたる。

中国語には明確に区別できる単音節がいくつあるのだろうか？

これは単音節の転写に適用される表記システムによって差が出てくる。

アベル＝レミュザ氏のシステム、あるいはフランス式表記法に従えば、450の単音節しかないことになる。

プレマール神父の表記システムでは、487の単音節が数えられている。

英国式表記法によれば、629である。

これだけではない。こうした単音節すべてが、5つあるイントネーションのうちの一つにそって発音される（これについては第3セクションで述べる）ので、中国語の単音節の全体数は適用される韻律システムによっても変わるのだ。

5つではなく4つの声調しか認めないアベル＝レミュザ氏の韻律システムにおいては、単音節の全体数はアクセントの変化により1,203となる。

プレマール神父のシステムでは、彼は中国人と同じように5つの声調を認めているので、アクセントのついた単音節の全体数は1,445となる。

ギュツラフ氏のシステムでは、その数は1,774にまで達する。

ここで主要な問題に戻ろう。

既にみたとおり、中国人の書き言葉における記号数あるいは文字数は、常用のものも廃れたものも合わせて、43,496を下るということはなかった。

またこれもみたとおり、話し言葉はギュツラフ氏の表記法に従えば629の単音節を超えることはなく、アクセントをつけられたものも1,774であった。

よって、中国人は629の単音節を表わすのに43,496の文字を持っているということになる。つまり、43,496の文字のうち、42,967はすでに［別の文字によって］音が表現されているような音を持っているのだ。

一見したところ、また表面的な観察に従えば、人は書記体系と話し言葉との間にある深い不

一致に驚くことだろう。またもしアベル＝レミュザ氏の言うように（『漢文啓蒙』の1頁目を見られたい）、漢字は発音を表わすのではなく、思考を表わすのだと認めるならば、困惑はさらに増す。代数と発音の間にどんな関係があるのだろうかと問うのと同じような感じで、中国人の書記体系と言葉の間の関係はいったい何なのかと人は問いたくなるだろう。第3セクションで、私はこの不一致が見かけだけのものであることを示そうと思う。しかし今は議論を続けよう。

まずどのように、そしてどんな要素のうえに、中国人の書記体系と言葉の関係は成り立つのか？

43のうち42の割合で、ほとんどすべての漢字は二つの部分からなっている。

一つの部分は音を表わす。それゆえこれは「音形（フォネティーク）」と呼ばれている[15]。

ときに事柄や思考を表わすもう一つの部分は、意味を決定するためにあるのだが、アベル＝レミュザ氏の言うように不当にも「語根（ラディカル）」と呼ばれたり、また「部首（クレ）」とも呼ばれている。

よってほとんどすべての漢字において（というのもほとんどの漢字が組み合わさってできているものだから）二つの部分、表音文字的要素と表意文字的要素があるということができる。

例えば“巴（pa）”という音形を取り上げてみよう。

この音形に、心あるいは感情を表わす部首“忄”を加えると、“怕”という文字になるが、これは「心配する」という意味である。

もしまたこれに、病気や傷を意味する部首“疒”を加えると、“疤”という字になるが、これは「傷跡」という意味である。

手を表わす部首“扌”と一緒になると、“把（pa）”「取る」という字になる。

木・樹木を表わす部首“木”と合わせると、“杷（pha）”「熊手」という字になる。

豚を表わす部首“豕”と合わせると、“豝（pa）”「雌豚」という字になる。

舟を表わす部首“舟”と合わせると、“舥（pha）”「船橋」という字になる。

女性を表わす部首“女”と合わせると、“妑（pha）”という字になるが、これは少女たちが付ける髪留めを指す、等々。

もう一つ、“令（ling）”という音形を例にとってみよう。

---

[15] マーシュマン博士によれば、イギリス人とアメリカ人は音形のことを原始形（プリミティヴ）と呼んでいる。「原始形と呼ばれているのは、新しい文字を形成するために語根に添えられる部分を指す。この部分はまた音形（フォネティーク）であるとか、音声部分（ヴォーカル・パート）と呼ばれるが、それはこれが非常に多くの漢字において音を与えるものであるからだ。しかしこの規則には多くの例外もあるため、“原始形”という名がふさわしいように思える。けれどもそれは「原始形」が独創的な用語だからだとか、他に何か特別な理由があってそう呼ぶ訳ではなく、これが語根ではない漢字の部分を表すのに単に適しているからという理由で、そう呼ぶのである。原始形と呼ばれるのは、単にこの部分が、それ自身が形作る漢字より以前に存在するという理由からである」。ウェルス＝ウィリアムズ著、『中国語の簡単レッスン――特に廣東方言をたやすく覚えたい人のための段階的練習 *Easy Lessons in Chinese or Progressive exercises to facilitate the study of that language, especially adapted to the Canton dialect*』、マカオ、1842年。

この音形に、羊を表わす部首“羊”を加えると、“羚(ling)”の字ができあがるが、これはノロを意味している。

またもしこれに耳を表わす部首“耳”をくわえると、“聆(ling)”という字になるが、これは「解する」という意である。

金属を意味する“金”と一緒になると、“鈴(ling)”「スズ」という字になる。

鳥を表わす部首と一緒になると、“鴒(ling)”「ナイチンゲール」という字になる。

歯の部首と一緒になると、“齢(ling)”「年齢」という字になる、等々。

ここに見られるように、私が例に出した漢字のなかには、基本的に変わらない何かがあるが、それが音形である。これはすべての漢字においてそうである。音形を含まない漢字、あるいはそれ自体が音形でないような漢字は見つからない。それは次の二つの理由による。

一つには、少数の例外を除いてすべての音形が、それ自体で何の語根も加えることなしに、音と意味を同時に表わしている常用漢字を形成しているからだ。

二つ目には、ほとんど全ての語根は、音形としても用いられるからだ。しかしこの時、語根は表意的な価値を失い、音しか表わさない[16]。

この事実はまったく明白である。

しかしながら、漢字を形成する二つの要素のうち表意文字的要素のみがこれまで識者たちの注意を集めてきた。先にみたように基本的な要素である音的要素に関していえば、ゴンサルベス神父とマーシュマン博士以前には、だれも真剣な研究の対象としなかったのである。ヨーロッパで出版された最初の中国語文法の著者、フルモンは、字が部首に従って配列されている康熙字典を、人間精神の生みだした傑作とみなしていた。なぜなら、アベル=レミュザ氏もフルモンについて正しく指摘しているように、彼はこの字の配列を思考の哲学的配列ととったからである。しかし辞書編纂の観点からみれば、康熙字典における部首は一つのことしか提示していない。それは同類の意味のあいだの関係である。部首は一つのことにしか用いられない。それは漢字の分類である。アベル=レミュザ氏はいつものように(つまり勝利を収めるまで徹底的にということだが)フルモンのシステムにおける間違った点や誇張された点をやっつけているが、自身の漢字の研究では相変わらず語根すなわち表意文字的要素にしか専念しておらず、フルモンと同じく中国語の書記体系の音形や音声的要素はなおざりにしている。アベル=レミ

[16] 「原始形は便宜上、語根と取りもつ関係に従って5つのクラスに分けられる。それらは、1. 原始形として用いることのできる214の語根。2. 語根に付け加えて、それ自体は意味のないものからできる原始形。3. 二つの語根から成る原始形。別の言い方をすれば、二つの完全な語根に分けることのできるもの。4. 三つないし四つの語根からなる原始形。5. 別の語根を付け加えてできた派生語からなる原始形。あるいは二つの派生語からなる原始形」。(ウェルス=ウィリアムズ著、『中国語の簡単レッスン』、33頁)。英国人は「派生語」という語を複合語、すなわち一つの語根と一つの音形からなる字を指すのに用いている。

ュザ氏が文字の音形をどのように呼んでいるか、ご存知だろうか？「部首に加えられた意味のない線の集まり」である。意味がない、とは！これはまるで我々が語を作るところのアルファベットの文字に意味がない、と言っているのと同じである。

中国語の音形を作っている簡単で基礎的な線をそれだけ取り出してみれば、これらが我々のアルファベットの文字とは比較にならないということを私は進んで認めよう（それにこうした線の数は多くない[17]）。なぜなら我々の文字、言葉の要素と違って、それらは切り離されて独立した形では、何も表わさないからだ。

しかし我々の文字の連結したものと、こうした線の連結したものとの間には、大きな差異があるわけではない[18]。例えばｆ，a，o，n，という文字が連結して、単音節“faon”を作り、丶、一、ノ、ㇷ、という基本線が組み合わさって単音節“方（fang)”を作るように。

注意しておきたいのはただ一つ、最初の単音節“faon”が文字から成っているのに対し、二番目の単音節は線から成っているということである。

すでに述べたようにアベル＝レミュザ氏は、中国の書記体系の記号は一般的に発音を表わすものではなく、思考を表わすものだと教えている（『漢文啓蒙』の１頁）。

確かにアベル＝レミュザ氏の権威はたいへん重みのあるものだ。だが今日、カレリー氏の『中国語書記体系の音的システム *Systema phoneticum scripturae sinicae*』が出版された後では、誰が中国語の文字は思考しか表わさないなどという考えを支持しえようか[訳注2]。次のことを考えてみられたい。

康熙字典の中には、ギュツラフ氏の計算によると、4,200の、発音しか表わさない字があること。

例外なくすべての漢字が、多かれ少なかれ複雑な線による音形を呈していること。

語根自体、それが一緒になっている音形のグループから切り離されると、発音を表わし、それじたい音形となること。

最後に、文字は声調や発音を変えると意味を変えること（『漢文啓蒙』の26頁を見よ）。

アベル＝レミュザ氏は、彼の文法書の最初の８パラグラフを費やして、中国古来の作家たちに依りながら、中国語の書記体系の小史を紹介し、まだ何も知らない学生たちに象形文字・會意文字・指事文字などを教えている。中国語の読み書きを教わりたい者にとって、これは絶対に必需の知識とは言えないだろう。

実際のところ、今日にあっても象形文字はあるのだろうか？いったい中国語の書記体系に象形文字はこれまでもあったのだろうか？イメージや図・絵は、文字ではないし、“字（tse)”は

---

[17] 中国語の書記体系にある基本的な線すべてをひとつに集めて作れる文字がある。「永遠」を意味する“永（young)”という字である。

[18] 先の注を参照。

[訳注4] この書はマカオで1841年に出版されている。

イメージでも図でも絵でもない。文字は中国語の書記体系の記号である。この記号はいくつかの線で構成されている。こうした線は決まったやり方で組み合わされて、単純な文字においては常に発音を表わす。複雑な文字においては、基本的な部分は発音以外は表わさない。学生に大事なのは、こういう事である。学生が学ばなければならないことは、中国語の書記体系がことばと同じように変化すること、またこの書記体系が、教養人には思考と音とを写すものと捉えられるが、大衆にはむしろ音を写すものと捉えられがちであるということだ。これについては後に見ることになろう。

従って、組み合わされた字すべての中に、はっきり区別できる二つの部分、音形と語根がある。

音形とは何であろうか。

それは、言葉との関係において言えば、文字の根本的な部分であって、音を表わす記号である。音形、それは発音する声、中国語の書記体系の音声的要素である。

［それでは］語根とは何であろうか。

それはまさに表意文字的な記号、いやむしろ文字を定義するところの語源を表わす記号である。語根――それは用語体系のなかでは、音形が「種」を決定する記号であるのと同じように、「属」を記す記号である。語根――それは「文字ノ理性」（ラティオ・スクリベンディ）なのだ。

カレリー氏の功績は（彼に対しては多大な感謝を捧げなければならないが）、中国人が語根に関して為したのと比べられるような仕事を、音形に関して発表したことである[19]。よく知られているように、中国人は文字を分類するために語根をグループによって分けたのだった。だが組み合わされた文字の中には語根以外のものもある。語根は付随的な要素でしかない。音形こそが主要な部分なのであって、また数も語根より多いのである。康熙字典には 214 の語根があるが、カレリー氏の表記システムによれば、音形は1040、マーシュマン博士のものによれば、1689ある[20]。

とはいえ、こうしたことは、特にことばと方言を抽象化したような中国語を研究する者たちから反論を受けている。例えば私が“林（lin）”という音形を、部首によって文字を分類する古いシステム・やり方しか認めない中国学者に見せるとすると、彼はこの文字の中に“木”を意味する部首・語根しか、すなわち康熙字典においては60番目、14番目の位置を占め、用語体系において“木”のグループを示すものしか、見ようとはしないだろう。「確かにおっしゃるとお

[19] 「カレリー氏の『中国語書記体系の音的システム』は、これまで原始形について研究されてきたことを学者にまとめて提供し、また同じ原始形が別々の語根と結びついた時の意味の比較ができる点で、上級学習者をずいぶんと助けてくれる」。（ウェルス＝ウィリアムズ著、『中国語の簡単レッスン』、11頁）。

[20] 『*Chinese Repository*』、第7巻、255頁を見られたい。中国人が語根の数を214にまで減らしたように、我々も音形の数を少なくすることができる。しかしいずれにせよ音形の数は語根の数より多い。

りですが、ここには二つ並んでいます。どちらが語根なのですか?」と私が言ったとしよう。「左にある方でしょう」と中国学者。[彼は続けて]「[左側の]"木"は優勢的な部首なのです。その位置は変わらずに定まっています」。「すばらしい!ではもう一方はどうお考えですか?」「もう一方は語根であることを止め、文字のなかでは無意味な線の集まりで、音を記します」。「なるほど!しかしこうした線の集まりが音を示すのなら、これは無意味とは言えないのではないでしょうか。それに、[あなたの論には]ちょっとした問題がありますね。[右側の]"木"が"林"の文字の発音を示すというのは本当でしょうか?"木"はそれ自体では康熙字典によれば mou と発音されますが、"林"は lin と発音されます。これら二つはまったく似通ったところのない音です」。

文字の中に語根や表意文字的要素しか認めないこと、それは中国語の書記体系における根本的なものすべてを取り除いてしまうことである。それはまた、文字と単音節との関係、書記体系と言葉との関係を否定することでもある。ある中国学者の言を借りるなら[21]、それは中国の農民や商人、職人より低い位置に自らを置くようなものである。なぜなら彼らは少なくとも記号の音的価値を認めているからだ。

音形の重要性と、それが文字の分類研究に果たしうる利点の双方に気づいたカレリー氏は、語彙記述のシステムを考案したが、そのなかで彼は音形を科目に従って分類し、部首のシステムに変わる新しい分類のやり方を提示した。カレリー氏の語彙集は、およそ 14,000 の漢字を収めている。残念なことにこの 14,000 の文字のうち、少なくない数の文字が著作の注のなかにあったり、削除された文字の索引のなかにあったりして、著作がつくりあげたシステムと音声の序列の枠外におかれている。この著作の仕上げにはより多くを期待したいものである。

しかしこの二つのやり方、すなわち音形による分類の仕方と語根による分類の仕方のうち、どちらの方が優れているのだろうか。

二つを特徴づけてみよう。文語と口語を同時に勉強するのなら、音形によるシステムの方が語根のシステムよりはるかに優れていると私は思う。なぜなら多大な文献を読み込むためには非常に多くの文字の知識を必要とするからで、その際、音形のシステムをよく理解すれば記憶を増強することができるからだ。

一方で、官話や共通語の学習には、私の見るところでは、私の師スタニスラス・ジュリアン氏が考案した下位分類(これはゴンサルベス神父の不自然なアルファベットに代るもので、多くの利点を持つ)をつけ加えた語根システムの方が、音形のシステムより優れているようだ。つまるところ、3,000 字のために 14,000 の音形を知る必要があるだろうか?

記号の分類は、最も論争の多い点の一つである。どのように分類問題を捉えるにせよ、不完全な点があるとはいうものの『中国語書記体系の音的システム』が 150 年前に日の目を見な

---

[21] カレリー氏のことである。

かったのは残念なことである。決して忘れてはならないのは、中国人の言語と書記体系に関する最もばかげた想像を生みだしたのは、この部首のシステムだったということだ。それだから語根をおろそかにしてもいいと私は言っているのではない。(音形のシステムにおいても、語根はおろそかにされてはいない)。なぜというなら、いったい中国人にとって綴りの誤りとは何かという問題を考えてみるがよい。

中国人は、ある語根を別の語根と置きかえてしまったとき、これを綴りの誤りと言う。例えば、

“猩”(サル)を“惶”(静か)

“娥”(美人)を“蛾”(チョウ)

“坊”(店)を“房”(家)と間違えたとき、等々。

よって語根の知識、語根を音形に正しく対応させることが、中国では良い教育を受けたという最も確かなしるしなのだ。しかしながらこの種の誤りは、書物のなかでさえ珍しいものではない。廣東や福建地方、また一般的に商人の街で印刷された大河小説や短編、演劇作品には、綴りの誤りがごろごろしている。これはすでに大衆が文字の音声的要素しか考慮しておらず、もともとは表意・表音的な書記体系が、表音的になる傾向があることの証拠である。

しかしまだ注目に値する事柄がある。

中国では農民や職人、商人はどのように書くのだろうか？

廣東や中国南部、そして一般的にすべての県で、民衆が商業や工業に勤しんでいるところでは、商人・職人・労働者・奉公人たち等々が書くときには普通の書記体系とは形においても意味においても違う文字を使っている。まず商人たちは、民衆の書き方である草書体を使っているが、これは非常に崩された書体で、文字は言ってみればたった一筆で書かれるかのように形作られる。例えば彼らは“力(li)”と書くのに“カ”と書き、“文(wen)”と書くのに“ゑ”と書く。ところでこの書体の規則にしたがえば、文字の表意的要素は消えてしまうか、(あるいは同じことだが)音的要素と溶け合ってしまう。これだけではない。こうした文字は、書かれるためにあるのだが、書物の中のみならず語彙の中においても、持っている意味と意義を失ってしまう。つまり手紙を書く商人は、紙の上に書く草書体の文字の「発音」しか念頭においていないのであって、文字の「意味」についてはほとんどの場合知らないままなのだ。よって民衆の書記体系は完全に表音的と言える。

「以上のことから(と、カレリー氏は述べている)、漢字の知識はあるが中国語を話さない外国人が、民衆の書いたものを一行も判読することはできないのに対し、中国語の発音を知る現地の人々は、民衆の書いたものを読むのに何の困難も覚えない。しばしば彼らは文字の意味を知らないのであるけれども」。

§3. 文字とことばの対比

中国語の話し言葉の本性は、なぜかしら軽視されてきた。漢字の名、つまり単音節そのものである発音と、中国語の単語が混同されてきたからである。しかし単音節は必ずしも単語であるわけではない。それどころか多くの場合、次のセクションでみるように、単音節は単語の一部分でしかない。すでにアベル＝レミュザ氏は、どのようなやり方で中国人が非屈折でしかもあまりに曖昧な語をもつ不明瞭な言語をうまく用いているのか、また単音節がどのようにイントネーションによって増え、また 2 個ずつ、3 個ずつと複合語を作るのかを示してみせている(『漢文啓蒙』の§284-297 参照)。けれどもこのアベル＝レミュザ氏［の説明］は、よく理解されていないようだ。というのも、今日でさえ、もし私が東洋文献学のアマチュアに、「私は中国語の一単語で、1165 通りの書き方をされる語を知っていますよ」と言ったり、「私はアルファベットの i の母音で発音される 1165 の文字、1165 の語を知っていますよ」と言うとすると、アマチュアは特に戸惑いもみせず次のように答えるだろうから。「中国人が同じ名を 1165 の別の物質に与えているとしても、私は驚きませんね。アベル＝レミュザ氏の文法書に、中国語には同音の語が非常に多いと読んだ記憶がありますから。私の思い違いでなければ、アベル＝レミュザ氏は、中国人が話しながらお互いが理解できるように語を組み合わせる仕方を発明したとまで書いてあったと思いますよ」。

アベル＝レミュザ氏がよく理解されなかったわけは幾つかあるが、まず一つには、彼が間違って漢字と話し言葉の語を同一視してしまったからである。［中国語の］ことばは単音節的ではないと言った後、「漢字の数だけ語がある」と付け加えてもいる。漢字の名[訳注5]は全て単音節だと知られていたのに、である。彼はまた代わる代わる語を音節と、また音節を語と置き換えている[22]。彼の文法書の最もよく書かれているパラグラフに、不正確な文章や間違った不適切な用語が使われていることにもよる。最後に、書き言葉が話し言葉よりも先に存在したとする考え方をしなければ意味をなさない箇所が 7–8 パラグラフあるからである[23]。私は、あのように鋭

[訳注5] ここでは発音のこと。

[22] 「全ての中国語の語は、4 つの声調、“ssè-ching”と呼ばれるイントネーションの一つに従って発音されなければならない。これらのイントネーションは、語の意味を定め、また語の間に保たれるべき差違を作り出す。(『漢文啓蒙』の§49)。全部で 450 の音節は、アクセントの変異により、1203 まで増える。これら 1200 もの音節は、何千もの漢字を発音するのに使われるので、一つ一つの音節が幾つかの漢字に対応しなければならないことは確かである。言いかえれば多くの漢字が、別々の意味を持ちつつも、全く同じように発音されるということである、云々」。このような単音節と語の混同は、この文法書の隅から隅まで繰り返されている。

[23] 「レミュザ氏の研究が引き出す非常に興味深い結果は、書記体系がいわば社会より前に生まれるという観察である」。(アンペール［Ampère］、「中国とアベル＝レミュザ氏の業績について De la Chine et des travaux de M.Abel-Rémusat」、*Revue des deux Mondes,* numéro du 14 novembre 1832 参照)。

い洞察力とエスプリを持ち、博識と独創的な意見や正しい着眼にあふれた数々の覚え書の著者である氏が、なぜ例えば次のような意見を出されるのかが分からない。「話しながら理解しあうために［中国の］人は複合語を簡単な言葉に言い換えたのだが、その結果、同音語が多くなってしまったために、あまりにどうとでもとれる言葉になってしまった」（『漢文啓蒙』の36頁）。

ここで高名な著者に逆らって、いかなる言語もこのようなやり方で形作られることはなかったと言わねばならない。従って次に続くセクションでは、中国語の語がどのように生じたかを問うことはしない。私は語がどのように作られているかを問うに留める。しかしこの微妙な問題を扱う前に、書記体系とことばの比較を打ち立ててみよう。

中国語において、かなりの数の同義語あるいは同音語があるというのは本当だろうか？

中国語には明確に区別できるものとして350の単音節しかない。言語のもつ全ての材料は、御覧の通りこれだけである、と人は言うかもしれない。しかしながら語の材料がこれだけの数しかないのは、中国語の全ての単音節を表す必要な記号が我々のフランス語の綴りのシステムに欠けているからである。次のことを考えてみられたい。フランス語の綴りのシステムにおいては、a、o、ô、ouの前に置かれたhの文字は、スペイン語のjあるいはギリシャ語のイオタ［ι］と同じ価値をもつ。同じ文字がeかiの前に置かれると、空気を出す音となるが、これは短母音の後に来たドイツ語のchと同じ現象である。この言語［中国語］には、アラブ語のεもあれば、ポーランド語のłもある。（『漢文啓蒙』の§46）。ほとんど全ての硬音と帯気音は、中国人に固有の調音を表している。三重母音についても同じである。各民族は彼らなりのやり方で声音を変容するからだ。音の種類は廣東と福建地方では更に多くなる[24]。タベール司教は、コーチシナ言語の中に12の単一母音、31の二重母音、21の三重母音、26の語頭子音と8の語尾子音を弁別している[25]。従って、幾つかの子音を除いて、我々の持つ調音と母音の全てを中国人は持っているだけでなく、我々の持っているものではまだ足りないぐらいなのだ。

イントネーションと呼ばれている、大変重要なうえに型にはまらないこのメロペ［詩の旋律、節］以外にも、中国式の発声法は非常に微細な調音のニュアンスを持っている。しかしこのイントネーションが単一音節の数を増やしているのである。イントネーションの数は、官話すなわち共通語において2倍にも3倍にも、いや4倍にもなりうる。廣東の方言では、5倍、6倍、7倍、8倍にもなる。南の地方では、イントネーションとアクセントが強く、北の地方では気音が強い。共通語では、5つの声調が使われているが、廣東と福建地方の方言では8つ、すなわち高声調が4つ、低声調が4つ使われている。カルリー氏の指摘によれば、一般的に、首都や北の地

---

[24] *Chinese Reposetory*, vol. VI, 579頁と、vol. VII, 57頁を見られたい。またメドハーストの辞書の前書き（*Dictionary of Hokkëen dialect*）、ダイヤーの語彙集（*Vocabulary of the Hokkëen dialect*）、ブリッジマンの名文集の序文を参照されたい。

[25] 『南越洋合字彙』の前書きを見よ。*Dictionarium anamitico-latinum*, inceptum à P.J. Pigneaux, dem absolutum et editum à J.L. Tabert, Serampore, 1838.

方から離れるほど、つまり芸術・科学・文化の中心から遠ざかるほど、イントネーションは強くなるようである。従ってアクセントはコーチシナ方言の方が廣東方言より力強く、その廣東方言のアクセントは福建方言より強く、福建地方のアクセントは北京方言より認識しやすいのだが、北京まで来ると、アクセントはあるかないか分からないものになっている[26]。

しかしながらカルリー氏の証言は、ここである有能な通訳の証言と食い違っている。ギュツラフ氏は、イントネーションがなければ中国語は単なる訳の分からない言葉になってしまうと明言している[27]。私は中国語のイントネーションについては判断能力を持ち得ない。けれどもギュツラフ氏がこのイントネーションについて為した判断を、官話すなわち共通語にまで適用しているのは許されないことではないかと思う。福建地方の方言や廣東方言を話したいと思う者には、声調の学習が不可欠であることは私も否定しない。しかし、思い切っていうならば、官話すなわち共通語に関しては同じようではないし、またそうであってはならない。理由は簡単である。なぜなら官話においては、単音節どうしは語を形成する際に結びつくからで、結びつく時に単音節はそれが帯びている特有の声調の何かをどうしても失ってしまうからである。我々フランス人は、英語を発音するのが非常に下手である。長母音と短母音を区別しないからだ。［英語を］話す際に我々は ill と eel、hill と heel、it と eat、heat と hit 等々の間に違いを持ち込まない。しかしながら英国人たちは我々の話すところを理解している。ところが英語は官話よりも単音節の語の数が多いのである[28]。

［アベル＝レミュザ氏の］同義語と同音語の話に戻ろう。氏が中国語の語彙体系に与えている不完全で混乱した観念がどこから来ているか、私は指摘してみようと思う。それはシボ神父の表した「中国語に関する試論」という覚え書であり、北京に派遣された宣教師たちの覚え書の第 8 巻に所収されているものである。

「何よりもまず、私は中国語には 350 の語しかないなどとでまかせを言った人たちに抗議したい。これは外国人が l'eau、los、l'os、lots の 4 つの語の発音の違いを把握できないから、フランス人が「水」「称賛」「骨」「分け前」を表すのに一つの語しか持っていないと言うのと同じである。ヨーロッパ人が「ツバ」「両親」「米の一種」「全て」「眠る」「疲れさせる」「tsin 川」という語を « tsin »と書こうとして、同じ語がこれら全ての意味を含んでいる、と言うようなものだ。ヨーロッパ人のアルファベットが tsin と別の tsin を見分ける発音と声調を持っていないからと言って、それが中国語の悪いところだと言えるだろうか？　フランス人の耳が l'eau、los、l'os、lots を間違えないように、中国人の耳も tsin の音の違いを聞き分けるのだ［訳注 6］。さらに

---

26 カルリー、『中国語書記体系の音的システム』*Systama phoneticum scripturæ sinicæ*、72 頁。

27 *Notice on Chinese Grammar*, part.I, by Philo-Sinensis, 7 頁。

28 ヨーロッパ人にとっては、廣東や福建地方の方言よりも官話の方が学習しやすいし、また発音も正確にできる。これは現在、周知の事実である。

［訳注 6］ 実際には上に挙げられた 4 つの単語の発音はみな[lo]であるので、フランス人は音声の違いを

言うなら、話しながら中国人が音に付ける差違は、フランス人のそれよりずっと際だっている。これだけのことからしても（とシボ神父は勝ち誇ったように言う）、350という数は数倍になるだろう」[29]。

「それほどでもない」と、この博識な宣教師に向かって答えられる。「なぜというなら、声の抑揚や気音、声調、様々なアクセント全てを持ってしても、あなたの言う通りに、またあなたの計算通りにしたとしても、語の総数は1445までにしかならないからだ。ところではっきり言ってしまえば1445の語を持つ言語は、350しか持たない言語と同じぐらい、不毛で粗忽で野蛮である」。アベル＝レミュザ氏は、まず間違えていた訳ではない。文法書以外のところで話し言葉と書き言葉の対比関係を見出そうとしながら、中国語語彙論に関する宣教師の考え方をつねに信じ切っているこのアカデミー会員［アベル＝レミュザのこと］は、次のような言葉で自らの考えを表している。

「最初のもの（話し言葉）は、内容に乏しく不完全なものであるが、これはかろうじて文明化された部族の言語である。この言語はつねに繰り返される少数の音から成り、耳を疲れさせる。この言葉は、もしそれを話す人々の中にいれば、他の言語と同じように数ヶ月で学習できる。もう一つのもの［書き言葉］は、表現が豊かで文人の要請に従って形作られたものだが、思想家たちの共同体の知の道具として用いられる。この言葉は多数の象徴からなるが、この象徴の組み合わせは無限で、多かれ少なかれ深められた研究の度合いに応じて、知性と想像力を満足させるものである」[30]。

中国人が長い間外国語を勉強しているという考えを支持すること（アベル＝レミュザ氏は疑いようのない証言でこれを証明している）と、この民族の言語がかろうじて文明化された部族のそれだと断定することは、二つの相容れない主張のように私には思えるし、中国人が学校や高等教育機関、図書館、アカデミーとその会員を有していることを考慮するなら、多少なりとも矛盾した考え方のように見える。

ここでシボ神父の覚え書から別の箇所を引用するのを許して頂きたい。そうすることで中国語は形を変えるから、あるいは別な視点のもとに姿を現すからである。中国人によって話されている言語は、内容に乏しく不完全で、1445しか語の数がないものだが［訳注7］、豊かすぎるものにもなりえるのだ。シボ神父は次のように書いている。

「もしこの中国語に何か非難する点を見つけるとするなら、それはこの言語が豊かすぎるということだ。私は最もよく中国語を学んだ宣教師たちの証言を借りたいと思う。20年30年の学習の後も、彼らは初めて出会う用語と対峙しているのである。これは最も学識のある文人たち

聞き分けているのではなく、文脈から意味の違いを読みとっていることになる。

29 『北京の宣教師たちの覚え書 *Mémoires des missionnaires de Pékin*』第8巻を見よ。

30 『アジア雑録 Mélanges asiatiques』、第2巻、128頁。

［訳注7］ ここでバザンは先のアベル＝レミュザの言を引用しているのである。

にしても同じである。彼らのうち誰一人として、ことばをかなり知っていると自惚れる者がいないばかりか、そのような物言いは自らを困惑させることになるだろう。ポステルでさえ、その驚くべき記憶力をもってしても、そのような知識を願ってみることすらなかったのである。簡単で基本的な語が他のものと結合することで新しい意味を得る仕方ほど、自然なことはない。たとえばダマスクは“緞 touan”と言われるが、これに“金 kin”という語を加えることで、“金緞 kin-touan”が得られ、これはブロケード、すなわち金糸の縫い取りのある布を指す。タバコは“烟 yèn ”、鼻は“鼻 pi”と言われるが、この二つを結合させると“鼻烟 pi-yèn”、すなわち嗅ぎタバコの意味になる。“恨 hen”という字は恨みを意味し、“懐 hoai”という字は、母が子を抱くように胸に抱くという意味である。遺恨という意味を表すのに、“懐恨 hoai-hen”という言葉ほど、生き生きした表現はあるだろうか？　このような言い方を理解するのには、文語を知る必要もなければ、本に頼る必要もない。こうした表現は自らのうちにその解釈と語源を有しているのである」[31]。この学識ある宣教師は注にこのように付け加えてもいる。「こうした語の結合は、ほとんどスピーチや会話のためだけにある。本の中では、ただ一つの漢字が、複数の語でのみ言い表せるようなことを描き、また明示する」[32]。

以上が結合語の形成に関するシボ神父の理論である。これを採用したアベル=レミュザ氏は、『漢文啓蒙』の第 2 部でどうにかこうにかこれを発展させている。それについて彼を非難するつもりは私にはない。しかしこの理論を採用するやいなや、つまり漢字を語として見るのを止めるやいなや、同義語・同音語云々の批判は崩れてしまう。中国語には、他の全ての言語と同じように、よく使う音や繰り返される音がある。反対に、使われるのが珍しい音もある。そもそもこの領域においてユーフォニー（耳に心地よい音）が探し求められるのは明白だ。これに納得したければ、ゴンサルベス神父の書いた会話の一頁を読むだけで事足りる。この会話は［書き言葉と話し言葉の］二つのことばで書かれている。人が中国語をどのような仕方で発音しようとも、すぐに気づくことは、“官話 kouan-hoa”を読むことが“文字 wen-tze”を読むことより限りなく易しくまた流暢に進むということだ。そこで人は言葉の動きを感じるだろう。文語は、それが話されないからこそ、口語の滑らかさやメロディーが全くない。これは別に中国語が、イタリア語と比べたときでさえ、特に滑らかでメロディーのある言語だというのではない。しかし人が発音するように発音した時、使用から生じた変更も考慮に入れると、常に文語と比べて口語は粗野ではなく、鼻にかかったものでもない。

中国語の単音節で最もよく使われるのは、i、tche、iu、ki、si、tchou、fou などである。“i”の音は、各音形の意味を決定する語根や表意的記号を考慮に入れずとも、43 の音声的種類をも

[31] 『北京の宣教師たちの覚え書 *Mémoires des missionnaires de Pékin*』、第 8 巻、150 頁。
[32] 同書、208 頁。

つ[33]。同じように、“tche”は42の音声種類、“iu”は33種類、“ki”は29種類、“si”は25種類、“tchou”は25種類、“fou”は21種類、つまりこうした単音節は、表意的記号を考慮に入れなくても、それぞれ43、42、33、29、25の書き方があるということである。これがずいぶんやっかいな点なのだ、と人は言うかもしれない。私もそれは否定しない。中国語の書記体系にある作られた記号の過剰性は、この書記体系の性格そのものから来ている。しかしながら、我々のアルファベットに“i”の母音が二つしかないとしても（なぜなら“y”も同じものなので）、“o”という母音は、我々の文法家によれば、フランス語で43もの言い方があるのである。シャルル・ノディエ氏は、この問題について、アルファベットは下劣なもののうちでも最も間の抜けたものであると考えているようだ。中国人はおそらくそこまでは言うまい。それに、少し注意を払ってみると分かるように、“i”は語ではないし、“tche”も“iu”も語ではない。フランス語の単語、idée、image、Italie、ivresseの最初の文節“i”が語でないのと同じように、中国語の単音節の“i”は語ではない。この点を私は今は主張しないでおく。この議論は当然次のセクション、すなわちことばの語を扱う際に問題となってくるだろう。

しかしその反対に、非常に制限された使用法しか持たず、一種類あるいは一つの音声的系列しか形成しない単音節もある。それらがfang、ngang、hang、je、jeng、niu、nou、nuen、noungの類である。以上述べたような単音節を語と見なすと、中国語と同じぐらい我々の言語にも同義語や同音語があるということになる。なぜなら例えば“桑 sang”という音形ひとつ取ってみても、これはフランス語の « sang »と同じような発音で、「桑の木」を意味する音形だが、これは合わせて5つの漢字しか形成しないからだ。すなわち：

瘙 sang、「馬の病気」

磉 sang、「円柱の台座」

搡 sang、「押し戻す」

顙 sang、「額」

嗓 sang、「ノド」

同じ音が、フランス語では6つの仕方で書かれ、6つの語となる。すなわち、

Cent、数字の「百」

Sang、男性名詞「血」

Sans、前置詞「一なしで」

S'en、代名詞と冠詞[訳注8]

---

[33] この43の音声的種類は、1165の漢字を提供する。従って“i”という単音節は、すでに注記したように、中国語においては1165の書き方があるということだ。

[訳注8] ここでバザンは二重の誤りをおかしているように見える。S'enは他に挙げられているものと同じような単語とは言い難いうえに、se（代名動詞の再帰代名詞）と結ばれるenは、副詞、代名詞にこそなりはするが、冠詞とはならない。

Sens、男性名詞「意味」

Sent、動詞「感じる」の3人称単数形

しかしもう一度言うが、私が上に引いた漢字は語ではなく、これらの漢字を語と捉えるのをやめれば、同音語［ばかりだ］という非難もなりたたなくなる。「フランス語は何千もの語があるのだから、24文字しかないアルファベットより豊かである」などと書こうと思う人がいるだろうか？　私はそうは思わない。また私は、人が350あるいは1445の単音節を康熙字典の43496の漢字と対比させて、話し言葉は書き言葉よりも貧しい言葉だなどと言うようなことを、いつの日か止めるだろうと思っている。中国語口語は文語のせいぜい3千語ほどを用いている[34]。私が言いたいのは、3千字で中国人は自分たちが言い表していることを書くことができるということだ。「口語はやはり文語と比べて豊かではない、なぜなら文語は3万字を有しているのに口語は3千字しか持たないからだ」と論じることができようか？　私に言わせれば、これは誤りである。文語はたいへんな数の漢字を用いるが、これには二つの理由がある。一つには、文語には口語ほどの複合語がないからである。もう一つの理由は、文語は口語より拡がりをもつ言語だからである。

文語は大衆にとっては入り込めないことばである。このことばは中国人の政治の秘密、長い歴史をもつ諸制度の秘密を隠している。このことばはまた百科事典的であり、あるいはむしろ様々な特殊言語から成り立っており、それらの一つ一つが独自の用語体系と学術語を持っている。そのようにして博物学や天文学、植物学、医学、法律学などのために漢字が必要なのである。

口語は我々の言語のように文法的で統辞法をもつ言語である。冷たくて無味乾燥な学術語や用語体系を持つ代わりに、この言語は日常生活や社会習慣のなかに入り込んでいる全ての用語を有している。これは会話のことばであるが、その会話とは自然でありながら繊細かつ優美なものだ。そもそも中国人が礼儀正しいことは知られている。口語もまた、その最上の部分において、国の文学的言語なのだ。

文語に属するのは、古代の遺物、碑文、古い神話、年代記、正史、地理学、医学、法律学、行政から出た書類、覚え書、緒言、批評、である。口語に属するのは、物語、小説、喜劇、戯曲、風俗小説、歴史小説、民間伝承、伝説や、そのほか想像力が生み出す作品のほとんど全てである。中国学者は選択することができる。しかし排除するべきではない。

---

[34]「ある人々は2千字で十分だと言っている。これは増え続ける概念を考慮に入れずにということであるが、こうした概念は文学的・宗教的主題について書く人たちによって表現される必要がある。結果として我々が言えるのは、普段の生活の便のためには、上記に挙げた数でほとんど十分であるということだ・・・」(*Gutzlaff's Notices on the Chinese grammar*, part.I, p.14 参照)。またダイヤー［Dyer］の表も参照のこと(*Dyer's Table of the most common characters*)。著者は3232の普段使われる漢字を挙げている。

翻訳附記

以上に訳出したのは、Louis Bazin, *Mémoire sur les principes généraux du chinois vulgaire*, Paris, Imprimerie Royale, 1845の前半部分（導入部分から第3セクション、原文49頁まで）である。もともとフランスの『アジア学報 *Journal Asiatique*』（第5号、1945年）に載せられた論文の抜き刷りとして出版されたもので、総ページ数は120頁。

本文はそのほとんどが仏文であるが、中国語の表記がある場合は“ ”内に入れてそのまま写し、また発音表記に関しても、同じようにバザンが用いたままを記してある。翻訳者が文章を補ったところは［ ］内に入れてある（訳注に関しても同様に［訳注1］とした）。文中の下線強調は、断りがない限りバザンによるものである。

この翻訳の機会を与えてくださった関西大学の内田慶市教授、また中国語翻訳にお手伝い頂いた同大学院生の伊伏啓子氏に心から感謝を表明したい。

なお次号に後半（第4セクション以後）を訳出することとする。